

(様式1)

令和6・7・8年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」
学校改善プラン(2年次)【小学校】

【学校名等】

学校名	城陽市立寺田西小学校							校長名	西城 誠一
学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援	児童数	3 0 0 名
学級数	2	2	2	2	2	2	3		
事業担当教員名	中村 絢子								
① 中学校区で目指す子ども像	・互いに認め合い、自ら考え行動する 自ら考え学び合う子 ・人と人とのつながりを大事にし、お互いを思いやりながら高め合える関係性を築き、社会の中で生きる力をもった子 これまで中学校ブロックで研究を進めてきた「学び合い」を軸に ICT 機器を活用して、「自分で考える力」「自分で学ぶ力」をさらに育んでいきたい。								
② 目指す子ども像	・自分で考え、その考えを自分よりではなく、他者との関わりの中で、さらによいものにしてしまったり、他者の考えを尊重したりする子ども。 ・学習や生活の中で他者との関わりが心地よいものだと感じ、他者との関わりの中で自分の考えを広げたり深めたりすることができる子ども。 ・人と人とのつながりを大事にし、自分と関わる人たちへの感謝の気持ちをもち、よりよく成長しようとする子ども。								
③ 目指す子ども像に対する現状と課題	一人一人の学力保障を確実にに行い、仲間とともに高め合える児童を育むために「学び合い」を全校的に行っている。そのため、仲間と協力して考えることが自然にできるようになっている。分からないことを友達に聞くことに対しても抵抗はない。分からないことは恥ずかしいことではないという雰囲気が学級の中にあるのはとてもよいことである。 一方で、グループ活動の中で常に教える側と教えられる側が固定してしまい、自分の考えをもてなかったり、自分の考えを話せなかったりする児童もいる。答えが決まった問題だけではなく、どんな考えも尊重されるような話し合い活動をする中で、自分の思いを自由に表現し素直に伝え合い、考えを深めていくことが課題である。 またペアやグループ活動だけでなく、学年や発達段階に応じて、学び方（タブレット・本で調べる・友達と話し合う等）を選択する「学びの最適化」を実践することで、より学びを活性化していくことが課題である。								
④ 目指す子ども像に達するための仮説	・ペアやグループで交流する際には、学び合いの目的をはっきりとさせたり、交流によって学びが深まるような課題を設定したりすることで、学びが活性化し、自分の思いを表現したり深めたりすることができる。 ・学び合いを取り入れた授業展開を充実することによって、自分の考えた道すじをほかの人の視点からも考え見つめ直す自己調整力が発揮される。 ・授業において振り返りを充実させたり共有したりすることで、自分の学びを振り返り、次の学習へのめあてをもったり、意欲的に学習したりすることができる。 ・授業と家庭学習をリンクさせ、自主的な学習を促すことで自分の学びを振り返り、認知能力を高めることができる。								

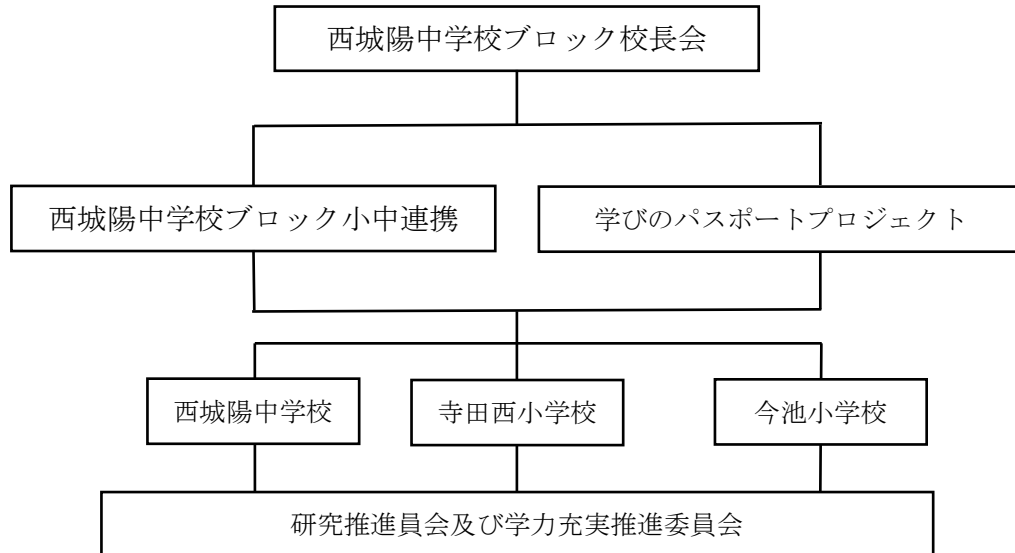
令和7年5月1日現在

【 1 研究主題】

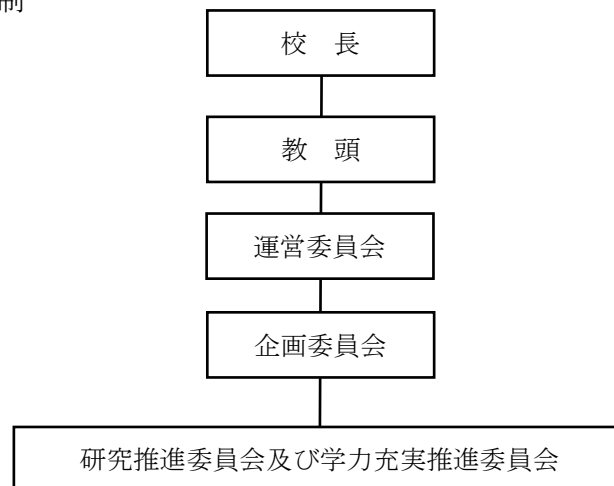
自ら課題と向き合い、仲間と共に高め合える児童を育む授業づくり
～学び合いを通して、思考の習慣化、非認知能力の育成～

【 2 研究組織体制】

(1) 中学校ブロックの組織体制



(2) 校内の組織体制



【 3 具体的な取組内容】

- ・ 4 月 本校職員に向けた研修（授業において発揮させたい非認知能力について）
- ・ 5 月以降 授業改善の視点を意識した授業の取組・公開授業（年 2 回）
- ・ 教員が、国語・算数・家庭科の 3 つの教科に分かれて授業研究を進める。
- ・ 7・8 月 3 グループによる授業の教材研究
- ・ 8 月 学びのパスポート結果分析（意識して取り組んだ非認知能力について）
- ・ 2 学期 研究授業（事前研修・事後研修）
- ・ 3 学期 年間の取組の振り返り

【 4 仮説及び成果を検証するための質問項目】

学年	質問番号	質問項目	概念	備考
4・5・6年	30	自分の考えた道すじをほかの人の視点から考えて、見つめ直すほうだ。	自己調整	導入

4・5・6年	3 3	目標を達成するためのよりよい方法をいつも考え、取り組み方を変えていっている。	自己調整	次時のめあて
4・5・6年	5 5	うまくいかなかったときでも、自分のことをきらいにならない。	自分らしさの発揮	まとめ 振り返り
4・5・6年	7 0	学習するとき、教科書やノートやプリントなどを見直し自分で大切なことがらを見つけ出して、整理している。	体制化	学習スタンダード
4・5・6年	5 9	普段の生活の中で、自分の考えを自由に話すことができる。	心理的安全性	学級経営を 基盤とする

* 5、6の分析項目は削除しています。

【7 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

個に応じた具体的な指導・支援方法

○4年生A児童への具体的な指導・支援方法

- ・本児を認めることのできる友達を作る。(教師が意図的に働きかける。)
- ・授業の中で意図的に本児が活躍する場面を作り出す。
- ・担任が褒めて、周りの児童からの評価を上げ、周りからも認められるようにする。

○5年生B児童への具体的な指導・支援方法

- ・「学び合い」の中で教えたり教えられたり、成功体験を積み重ね、友達との交流の良いイメージをもたせる。
- ・学習の過程を大事にして、目標を達成するためのよりよい方法を考えさせる。

○6年生C児童への具体的な指導・支援方法

- ・C児童は心理的安全性に肯定的に回答している。自分を表現するのが苦手だが、限られた人間関係では自分を表現できていて、現状に満足している。
Cに無理に授業で発表させたり表現させたりしようとしない。心理的安全性を保ち、少しずつ表現できるようにする。
- ・Cのそのまますを認めていく。

集団としての具体的な指導・支援方法

1. 「学び合い」に必然性をもたせる。
質の高い「発問」(問い)の設定
学ぶ意義・目的をはっきりとさせ主体的な学びにつなげる。
2. 児童の主体的な学びにつながる仕掛け
3. 「非認知能力」を価値づける。
意図的に仕掛けて 自己調整できるようなチャンスを作る
4. 「振り返り」を充実させる。
何について、どう学んだ。自分がどうしていくか。
何を学んだだけでなく、どんな学びをしたのか。
新たな「問い」を生み出す。

【8 仮説の修正】

- ・学び合いを取り入れた授業展開を充実することによって、自分の考えた道すじをほかの人の視点からも考え見つけ直す自己調整力が発揮される。

⇒自己調整力は、学び合いの場面で発揮するだけでなく、自分でじっくりと考える場面でも発揮されることから、学び合いだけでなく、一人学びの時間も大切にしていく。

【9 具体的な取組内容の修正】

3. 「非認知能力」を価値づける。
意図的に仕掛けて 自己調整できるようなチャンスを作る

⇒自己調整の見直し…「学び合い」の場面だけでなく、一人学びの時間にも自己調整を発揮できるよう授業の中に「一人学び」「学び合い」の時間を取り入れていく。

【10 児童の変容（普段の様子から）】

分析結果を踏まえた指導改善

4, 5, 6 年生が 1 月に行った非認知能力アンケートでは、自己調整の項目がどの学年もプラスに変容した。これは特に授業改善の視点としてあげた、自己調整の発揮を授業の中で意識して行ったことが良かったのだと感じる。授業者が意図的に仕掛けて自己調整できるようなチャンスを作ってきたからこそ、子どもたちが変容したのだと考える。

特に、4 年生の「課題が終わったら、自分が学んだことを簡単にまとめている。」という質問項目は、当てはまると回答した児童が増えている。授業者が児童に、自分が学んだことをまとめることを大切にしてきた結果である。

個に応じた具体的な手立て

6 年生 C 児童へ行ってきた手立て（前述）

C に無理に授業で発表させたり表現させたりしようとししない。心理的安全性を保ち、少しずつ表現できるようにする。C のそのままを認めていく。

⇒これにより C は担任が認めてくれていることを感じ、マスクを取り、10 月頃から少しずつ表現するようになった。担任以外の教師からも「C さん、積極的になったね。変わったね。」と気づかれるようになった。学びのパスポート分析を活用して児童に変容が見られた。

【11 3 年次の研究構想】

今後も心理的安全性を基盤として特に自己調整の非認知能力を授業において発揮することを目指す。

自分自身が学習において分かっていること、分からないことを明確にし、自分を客観的に捉えるメタ認知能力を育んでいく。そのためには振り返りの質を向上させていく。

また、目標達成のために自分に合った手段を選択したり、うまくいかない時には計画を立て直したりする力を付けられるよう、日々の授業に取り組んでいく。

そして、令和 6 年度当初には、真面目ではあるが主体性に欠け、受け身であった子どもたちが「先生に言われたからやる」という姿から、「自分の学びをより良くするために自分で考えて学習する」姿へと成長することを目指していく。